論 文 内 容 の 要 約

放送大学大学院文化科学研究科
文化科学専攻人文学プログラム
2016 年入学

椎名（しいな）　美智（みち）

1．論文題目

「させていただく」という問題系—歴史社会語用論的調査と考察—

2．論文内容の要約

本論文は、現代日本語のベネファクティブ表現の一形式「させていただく」に注目した歴史社会語用論研究である。「させていただく」を問題系として捉え、質問紙による意識調査と 2 つのコーパス調査を行なった。そこで得られた「させていただく」をめぐる現代の人々の意識と通時的変化から、「新丁重語」としての使用拡大、意味論的バリエーションの増大と語用論的バリエーションの縮小という「させていただく」の二面性を浮き彫りにした。本論文は 5 章で構成されている。各賞の内容は、以下の通りである。

第 1 章：イントロダクション

—「させていただく」という問題系と社会語用論的アプローチ—

第 1 章では、授受動詞とベネファクティブの出現の歴史をたどることによって、「させていただく」という問題系の所在を確認し、その問題系を調査するための歴史社会語用論的アプローチを確認した。

ポイントは以下の 2 つである：

(1) 「させていただく」は、「ベネファクティブ体系の変遷」と「敬意逓減の歴史」の中で観察する必要があること

(2)「もらう・いただく」の特殊性として、受け手主語であることが、同コンテクストで使用可能な「くれる・くださる」との違いであること

第 2 章：先行研究のレビューと分析の方向性

—「させていただく」の問題系とは何か？—

第 2 章では、授受動詞の本動詞用法とベネファクティブ用法に分け、先行研究を以下の 6 つの言語学的立場から、体系的にレビューした。

①規範文法的研究
②意味論的・統語論的・構文分析的研究
③社会言語学的・敬語史研究
④語用論的研究
⑤言語史・歴史社会語用論的研究
⑥ポライトネス理論的研究

筆者の立場としては、歴史社会語用論的アプローチと、ポライトネス理論の「距離のストラテジー」という考え方を使って、ベネファクティブを調査することとした。

また、先行研究から「させていただく」の問題系の構成要素を抽出し、以下の 3 つのリサーチ・クエスチョン(RQ)を提示した。

RQ1：「させていただく」の現在の用法の共時的特徴は何か？
(a)「させていただく」の受容と違和感に関与する要因は何か？
(b) 現在の「させていただく」の構成要素は何か？
RQ2：ベネファクティブと「させていただく」の通時的変化の特徴は何か？
(a) 日本語のベネファクティブの体系に生じている変化は何か？
(b)「させていただく」の使用環境に生じている変化は何か？
RQ3：「させていただく」の使用動機は何か？
「させていただく」の違和感を生じさせる原因は何か？
(a)「させていただく」の果たす語用論的機能は何か？
(b)「させていただく」使用拡大現象のポライトネス的背景は何か？

第 3 章：質問紙による意識調査
—「させていただく」の「文法化」と「新丁重語」の誕生—

RQ 1 に答えるべく実施した「させていただく」に関する質問紙による意識調査について、概要を報告し、調査結果を考察した。10 例文に対する「違和感」を従属変数とし、7 つの独立変数（「使役性」「恩恵性」「必須性」「性別」「年齢層」「出身地」「対話者役割」）を設定し、約 700 人の調査参加者に質問紙調査を行い、その結果を多変量解析（決定木分析）によって分析した。

その結果、「必須性」、「使役性」、「年齢層」・「話し手・聞き手」の順に、「違和感」の度合いに有意な効果があることがわかった。先行研究で重要だとされてきた「恩恵性」は、「違和感」に有意な効果がないことが判明した。また、ジェンダーも有意な効果を持たないことがわかった。

この調査結果から、「させていただく」の恩恵性の意味が希薄化し、

「させて」＋「いただく」ではなく「させていただく」という 1 フレーズの助動詞になる「文法化」の過程が現在進行中であり、「させていただく」は「新丁重語」として使用されているのではないかと論じた。

第 4 章：「させていただく」の前接部と後接部
—2 つのコーパス・データの調査結果—

RQ 2 に取り組むべく、時代の異なる 2 つのコーパス（『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』の部分コーパスと『青空文庫』）を使って、4 つのベネファクティブ（「させてもらう」「させてくれる」「させていただく」「させてくださる」）の使用状況（使用頻度、前接部、後接部）を調査し、その結果を報告し、考察した。

頻度調査からは、「させてくれる」と「させていただく」が選好されていることがわかった。また「前接部」は、以前は限定的だったが、現在は多様化していること、「後接部」は、以前は多様化していたが、現在は限定的であることがわかった。全体の機能としては、語用論的ストラテジーから意味論的ストラテジーへとシフトしていることがわかった。また、「させていただく」は使用が拡大しているが、インタラクションに関わるところでは定型化・平板化しているという、先行研究にはない知見を得た。

第 5 章：2 つの調査結果の考察
—ベネファクティブ「させていただく」使用拡大の要因と影響—

RQ 3 に答えるべく、2 つの調査結果から判明した「させていただく」の共時的特徴と通時的変化の結果を、歴史社会語用論的視点から考察した。授受動詞は本動詞からベネファクティブへと変遷する過程で、やりとりされるものが「事柄」、「行為」、「気持ち」へと徐々に抽象化してきた。そうした通時的変化の中で、「させていただく」は、「新丁重語」として使用されてきているのではないかという洞察を得た。また、コーパス調査から浮き彫りになった「前接部の多様化」と「後接部の縮小化」という二面性は、「させていただく」の使用拡大と違和感があるという批判の両方を説明することができることを論じた。

最後に、Goffman（1967）の概念を使って、「させてくださる」から「させていただく」へのシフトは「表敬(deference) =聞き手への敬意表明」から「品行(demeanor)＝話し手の謙譲表現」へのシフトであることと、日本語における敬意逓減のスパイラルの 2 つの傾向について論じた。永遠に続く距離感調整作業は日本語の宿痾であり、本論文で観察した「させていただく」の使用拡大も、そうした敬意逓減という通時

的言語変化の一部であることを述べた。

補遺として、「させていただく」のさらなる変化形と言える「させていただきますね」(共感の「ね」)「させていただいてもよろしいでしょうか」(許可求め表現付加)の出現を解説し、国立国語研究所が公開したウェブ・コーパスでの結果調査から今後の課題を提示した。

本要約における参照資料：

Goffman, E. 1967. *Interaction Rirual*. New York: Pantheon Books.